



紙上ギャラリー



カッパドキアの奇岩

トルコの中央アナトリアの高原地帯にあるカッパドキアは、キノコ状の奇岩が林立する世界的な景勝地です。奇岩は火山噴火で堆積した地層が長年の浸食で不思議な形の岩になった。先史時代からの洞窟遺跡。現役の家やホテルもある。多くの人が日本語を話し、親日的な国でした。

画／間森 坦 (中央区医師会)

自浄作用は機能するのか

監事 山川 雅義

人間の本性が善であれ悪であれ、私たちが集団・組織・社会の一員である以上礼法に則った秩序維持は当然であります。ここで、性善説や性悪説を持ち出すのはその内容も全く正反対ではないような気がしますので適切であるかどうか分かりませんが、当初、性善説では人間が先天的に具有する仁・義に基づく道徳によって政治を為すべきと説かれた(孟子)はずです。

ところが、国の統治には無関係なのか過去にこのような理念の下で政治が行われた形跡を見ることはほとんどありません。しかも、わが国の政治家は最近、国民を性悪説より度の強いメガネを通して見ていてはないかと感じます。厳しい規制と罰則、高齢者を含め生活弱者に冷い政策が目白押しです。

他方、国民に目を向けると様子が一変します。経済(景気)回復を感じることなく雇用不安、所得漸減および社会保障切捨ての危機に喘ぎながらも、困った人や救いを求める人がいれば手を差し延べたり施を成すのを見聞きするではありませんか。本性に善なる部分を持ち合わせているからこそできることです。

しかし、過ちを犯したり思いがけず他に危害を加えてしまったとき、人はどのように反応し対処するのでしょうか。とくに重大な事象が生じたときは恐れ戦き事故・事件そのものを隠蔽し、露見すると正確な顛末

を弁明するのではなく弁解に終始します。個人・組織を問わず当事者を見てみると、どこに自浄作用が働いているのか疑問に感じることがあります。

自浄作用とは、人間の本性に善・悪両面が存在するのであれば、できる限り悪を抑え込むためにみずからの手でみずからを律し、ひいては、人間同士や社会の安寧を維持する手段の一つであるはずで

ここで、自分に置き換えてみたらどうでしょう。似たようなことが降り懸った場合、やはり同じような態度・行動を取るような気がします。“人はミスを犯すもの”であると同時に“人は弱いもの(それほど強くはないもの)”でもあります。

それでは、「端から自浄作用を無視しては……どうせ自浄作用なんて働くはずがないのだから」と決めつけてたくなりますが、今の社会では許されることではありません。

安全・安心な生活の実現のために、わずかでも残っている良心の呵責に期待するだけでは不十分ですが、自浄作用活性化に向けて議論することはきわめて重要であります。

目標は崇高である上に遠くにあって見えにくいものですが、自浄作用活性化は、私たちに求められる永遠の課題なのかも知れません。